

古典解釈
シリーズ

文法全解

玉勝間・うひ山ぶみ

〔付〕源氏物語玉の小櫛

監修

国学院大教授・文博 今泉忠義

東京教育大助教授 鈴木一雄

枉 繁 著

旺文社

国学院大教授・文博 今泉忠義 監修
東京教育大助教授 鈴木一雄

文法全解 玉勝間うひ山ぶみ

〔付〕源氏物語玉の小櫛

回 古典解釈シリーズ

梶 繁 著

旺文社

© 梶 繁 1970

は し が き

本書は「文法全解・古典解釈シリーズ」の中の一冊として、本居宣長の数多い著作の中から「玉勝間」・「うひ山ぶみ」・「源氏物語玉の小櫛」を選び、日頃の授業の予習・復習の伴侶となるとともに、大学入試のための参考書としても活用できることを目ざして書かれたものである。

宣長は、国学を大成し国語学を体系づけた江戸時代中期の大学者で、儒・仏などの外来思想による思考態度を極力排除して、純粹な日本精神を追求した。「古事記」・「万葉集」・「古今和歌集」・「源氏物語」といった古典の研究から、助詞・活用・仮名づかい・係り結びなどの文法の研究に至るまで、どの一つを取ってみても、その部門の大学者の優れた業績となるような宣長の学問の幅の広さ、深さである。宣長がこのような数々の大事業とも言える業績を成し得た理由はどこにあるのか、本書ではそういう宣長の学問に対する心構え、態度、方法などを追求しようとした。

学問に対する真剣な取り組み、労を惜しまぬ資料の収集、緻密な思考、科学的実証の尊重、いい加減な判断や妥協を許さぬ厳しい態度が「玉勝間」・「うひ山ぶみ」には見られる。また「源氏物語玉の小櫛」に見られる文学観は、彼が単なる古典学者、文法研究家ではなく、人間尊重のヒューマニストでもあることを示している。

本書は国学者宣長の書いた文章だけあって、他の古典と比較した時、はるかに読みやすく、理解しやすいであろう。しかし、諸君は、読解・通釈ができたからといって満足することなく、宣長の言わんとする所、あるいは学問に対する態度をよく考察し、本書をとおして少しでも学問に対する関心を高め、その向上に資するものを学び取ってもらいたい。それが諸君の勉学の一助ともなれば幸いである。

一九七〇年一〇月

著 者

目

次

▽はしがき

▽本書の構成・内容と利用法 (六)

▽文法用語略号一覧 (八)

本居宣長について

本居宣長の生涯……………九

宣長の誕生……………九

賀茂真淵の門にはいる……………九

鈴の屋……………九

宣長の死……………一〇

契沖・真淵の影響……………一〇

学風の展開……………一〇

京都遊学……………九

「古事記伝」……………九

「玉くしげ」……………一〇

国学の大成……………一〇

古典研究……………一〇

「玉勝間」について

一、成立と構成……………二

成立と刊行の年代……………二

二、書名	二
------	---

書名	二
書名の由来	二

三、内容	三
------	---

内容	三
文体	三

「うひ山ぶみ」について

一、成立	三
------	---

成立	三
執筆事情	三

書名	三
----	---

二、内容	三
------	---

内容	三
----	---

「源氏物語玉の小櫛」について

一、書名と構成	四
---------	---

成立	四
書名の由来	四

構成	四
----	---

二、内容	四
------	---

内容	四
「源氏物語」について	四

「もののあはれ」	四
----------	---

玉 勝 間

- 一、めづらしき書をえたらむには、したしきもうときも……………(古書どもの事 一の巻)……一六
- 二、ちかき世、学問の道ひらけて、大かた万のとりまかなひ……………(あらたなる説を出だす事 一の巻)……二〇
- 三、大かたよのつねにことなる、新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず……………(あらたにいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事 二の巻)……二四
- 四、おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ……………(おのが物まなびの有りしやう 二の巻)……二四
- 五、宣長、三十あまりなりしほど、縣居の大人のをしへを……………(あがたゐのうしの御さとし言 二の巻)……四三
- 六、世の物しり人の、他の説のあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをも……………(ひとむきにかたよることの論ひ 四の巻)……四九
- 七、同じ人の説の、こゝとかしことゆきちがひて……………(前後と説のかはる事 四の巻)……五三
- 八、けんかうほうしがつれづれ草に、花はさかりに……………(兼好法師が詞のあげつらひ 四の巻)……五九
- 九、物まなぶともがら、物しり人にあひて、物とふに、ともすればまつ、古書の中にも、……………(学者のまつかたきふしをとふ事 四の巻)……六七
- 十、古今集に、やまひして、よわくなりける時よめる……………(業平朝臣のいまはの言の葉 五の巻)……七一
- 十一、ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるはならべるくだり……………(書うつし物かく事 六の巻)……七四
- 十二、よろづよりも、手はよくかゝまほしきわざなり……………(手かく事 六の巻)……九九
- 十三、すべてゐなかには、いにしへの言ののこれること多し……………(ゐなかにいにしへの雅言ののこれる事 七の巻)……八三
- 十四、古よりも、後の世のまされること、万の物にも……………(古よりも後世のまされる事 十四の巻)……八九

う ひ 山 ぶ み

- 一、学問に心ざして、入りそむる人、はじめより……………(うひ学び 七)……九四

源氏物語玉の小櫛

- 二、然はあれども、まづかの学びのしなじなは……………(うひ学び)……………七
 三、詮ずるところ学問は、ただ年月長く倦まず……………(うひ学び)……………一〇
 四、文義の心得がたきところを、はじめより……………(心得がたきところ)……………一三
 五、そもそも道統伝来のすちを、重くいみじき事にするは……………(和歌に師匠なしといふ事)……………一五
 六、さるは神学者歌人のみにもあらず、中昔よりこなた……………(和歌に師匠なしといふ事)……………一七
 七、さて又世々の先達の立ておかれたる、くさぐさの法度……………(和歌に師匠なしといふ事)……………二〇

- 一、おほかた物語は、世の中にありとある、よきこと、あしきこと……………(物語といふもの)……………二四
 二、さて物語は、もののあはれを知るを、むねとはしたるに……………(情と心)……………二六
 三、物のあはれを知るといふ事、まづすべて「あはれ」といふは……………(「あはれ」といふ事)……………二八
 四、又後の世には、「あはれ」といふに、「哀」の字を書きて……………(「あはれ」と「哀れ」)……………二九
 五、こゝらの物語書どもの中に、此の物語は、ことにすぐれて……………(すぐれてめでたき物)……………三三
 六、たゞ此の物語ぞ、こよなくて、殊に深く、よろづに心を入れて……………(すぐれてめでたき物)……………三五

本居宣長年譜……………	一六
本居宣長の主要著書……………	一七
国学者の系譜……………	一三
〔付録〕……………	
〔参考文献〕……………	
索引……………	一三

宣長の郷土観……………	三
国学者の四大人……………	四
「おかし」と「をかし」と二つある事……………	五
宣長の古代主義……………	六
書紀の斉明御巻なる童謡……………	七
万葉集「莫鷺圓隣云々の歌」……………	七
「つひにゆく」の歌について……………	七
写本……………	七
真淵と宣長……………	七

本書の構成・内容と利用法

■ 本書の構成・内容

▽教科書所収例文のすべてを網羅

本書は現行高等学校教科書「古典甲・乙」にのっている「玉勝間」・「うひ山ぶみ」・「源氏物語玉の小櫛」の全例文、および、大学入試問題として頻出する文章と、代表的名文と称せられる章段とを精選し、比較的短期間のうちに、基礎力から高度の内容探求力まで養えるように細心の配慮がなされ、まとめられている。

▽読みの障害を排除した本文

古典学習の第一の障害である歴史的かなづかいについて、本文が漢字の場合は横に歴史的かなづかいを示し下に現代かなづかいによる読みがなをつけ、ひらがなの場合は横にかたかなで現代よみを示している。なお原文の表記は「本居宣長全集」（筑摩書房）によっているが、特殊なかなづかいや用字などで、学習に不適切と思われる部分は教科書の表記に近いものに改めてある。

▽文学作品としての理解と鑑賞

「玉勝間」・「うひ山ぶみ」・「源氏物語玉の小櫛」は、思想・趣味・生活などに関する意見から感想にいたるまで、多種多様な内容をもっている。特に学問に対する厳しい態度・広く深い知識と情趣を愛

する心などで満たされているので各段の解説にはその点に留意した。更に冒頭での作品の内容・作者の生涯の解説は本居宣長の作品に対する理解を深めるように配慮した。また探求欄でも読解と並んで、内容の味わい方に留意し、作品の理解鑑賞の資とした。

▽全例文の一語一語を品詞分解

すべての例文を一語一語に分解して、品詞名、活用の種類、活用形はもちろん、文法上の意味・用法、係り結び、音便、接頭・接尾語、中止法など、高等学校で学ぶ範囲の文法事項はすべて、本文の左に傍線を引いて明示したので、文法上の疑問はただちに解決できる。なお、八ページ「文法用語略号一覧」を参照のこと。

▽正確かつ自然な通釈欄

各例文の下に示されている通釈は、原文につきすぎると不自然なものとなり、離れすぎると理解しにくくなる。そこで本書は語学的に正確であること、口語として自然でわかりやすいことを念頭に、補足部分は（ ）で示し、本文と照らし合わせて正確に解釈できるように配慮した。

▽充実した語釈・文法欄

「玉勝間」・「うひ山ぶみ」・「源氏物語玉の小櫛」読解上特に重要な語句や文法事項を大見出しにし、語釈・文法の重要度が一目でわ

かるようにしてある。なお、語句の解説項目は◇印、文法事項を詳説してある項目は◆印で区別して学習しやすいようにしてある。また、文章構成のうえで問題となりそうなところも語釈・文法欄のほか、必要に応じて探求欄で精密に解説したので、複雑な文章も整然と理解できる。

▽探求欄では教科書の学習課題と

何を読みとればよいかを解明

探求欄では、各教科書所収の標準的な「学習課題」(学習の手引、研究、設問)などと、大学入試でねらわれる事項をとりあげて説明し、その文章のどういうことを読みとり、何を味わえばよいかを詳細に示した。

読解の研究は、その場かぎりの理解にとどまることなく、古文読解の技術を身につけるという目的から、広く古文一般に通ずる読解のルールを深くつっこんで解説してあるが、単なる字句・文章の解釈に終わることなく、文学的内容の理解や、鑑賞面にも意を用いてあることは言うまでもない。——これによって、語釈・文法の基礎学習と内容表現の研究が密接につながり、充実した学習ができるはずである。

▽本文理解を助ける参考事項

本文に挿入してある図版、および巻末の年表、系図などは、歴史的背景の理解に役立つことはもちろんのこと、冒頭の解説記事とともに、本文学習の助けとして役立てることができる。

■ 本書の利用法

▽教科書と併用して学習する場合

本書は教科書所収の全例文をとりあげているので、教科書学習に直接的に役立つ。

まず教科書の例文をよく読んで内容をつかみ、語句や文法、学習課題などを考える。そしてここで生じた疑問点をノートしておき、本書を開く。本書ではまず、語釈・文法欄を参考にして内容を読みとり、ノートした疑問点を解決しながら必要事項を補う。このように疑問を発しながら、それを解決するために教科書と併用させていく学習が効果的である。

▽本書で独自の学習をする場合

教科書から離れて、本書で独自に学習するときは、少なくとも二回は読み通すことが必要である。

まず一回めは、語句・文法の解明に重点をおいて精読する→内容を確実に把握する→ノートにメモをとりながら注意深く読み進み知識の整理、確認をする。

二回めは内容の探求に重点をおいて精読する→探求欄の課題の解答をしてみる→本書の解答と比較検討してみる→整理

いずれにしても、初めから本書に頼るのではなく、「玉勝間」・「うひ山ぶみ」・「源氏物語玉の小櫛」そのものに直接ぶつかるつもりで、自分で疑問を発し、自分で考えて行く過程において本書を利用することが、ほんとうの活用法なのである。

本居宣長について

本居宣長の生涯

宣長の誕生

京都遊学

賀茂真淵の門には いる

「古事記伝」 鈴の屋

本居宣長は江戸時代中期の国学者であり、享保十五年（一七三〇）伊勢国松坂（今の三重県松阪市）に生まれた。幼名富之助、十二歳の時栄貞、二十六歳の時宣長と改めた。もとは小津姓、父定利、母於勝、弟ひとり、妹ふたりのほか、養嗣子の義兄定治がいた。家業は木綿問屋で、江戸にも店を持ち、かなり手広く商売をしていた。宣長が十一歳の秋父が死に、定治が家業を継いだ、その定治も、宣長が二十二歳の時に死んだので、宣長が家督を相続した。父の死後は家産も傾いていたが、母の心づかいもあって、宣長はその頃までに習字・謡曲・茶の湯・漢学・弓術などの教養を授けられていた。宣長が家督を相続したものの、母は宣長が商人に適さないことを知り、医師として身を立させようと京都に遊学させた。

宝暦二年（一七五二）三月上京した宣長は、医学と共に漢学・和歌も学び、特に漢学の師、堀景山（一七五二—一七九七）が国学にも心を寄せていたので、景山を通じて契沖（一七四〇—一七九七）の著書を読み、彼の「百人一首改観抄」を読んでからは古典の研究を志すようになった。宝暦七年（一七五七）、松坂に帰って医師を開業したが、そのかたわら「源氏物語」を初めとする古典の研究も怠らなかった。二十八歳の時、賀茂真淵（一七五七—一七九七）の「冠辞考」を読んで敬服していたが、宝暦十三年初めて松坂の宿に真淵を訪ね、たちまちその門人となった。そして真淵の激励や助言により、「古事記」の研究を生涯の仕事とする意を固めた。

「古事記伝」は、明和元年（一七六四）に初めて稿を起こしたのであるが、宣長は、翌年、自宅の二階に書齋を増築し、「鈴の屋」と名づけた。階段の取りはずしが自由に出来るようにし、ひたすら研究に励み、三十五年の歳月を費して、寛政十年（一七九八）に完成したのであった。もっともその



古事記伝草稿（鈴の屋蔵）

「玉くしげ」

宣長の死

国学の大成

契沖
真淵の
影響

古典研究

学風の展開

間、古事記の研究と著述だけをしていただけではなく、開業医（主に小児科）として患者を診療しながら、門人を集めて古典の講義をしたり、歌会の指導をしたり、他に多くの著述もしている。

門人の数も安永二年（二七五）のころは、まだ五十名にも満たなかったが、年を追ってふえ、享和元年（二八〇）には五百人にもなろうとしていた。国学者として、宣長の名声が高まるとともに、大名から招かれたりしたが、松坂の地を愛していたので、仕えようとしなかった。しかし、紀伊侯は、松坂に居住する事を許して招いたので、以前に政治上の意見を求められて「玉くしげ」という書物を書いて献上した関係もあって、松坂に居住したまま紀伊侯に仕えた。しかし、宣長は最後まで、庶民の子弟を教え、国学の普及の為に京都や周辺の地を旅し、鈴の屋の書齋で学問に専念したのであった。

寛政十二年（二六〇）七十一歳の七月、自分で遺言状を書き、「秋津彦美津桜根大人」と死後の名前も自分で決め、墓地も山室山の頂きに定め、翌享和元年（二八〇）九月二十九日に一生を終えたのであった。

宣長の学問は、一口に言えば、契沖によって始められ真淵によって一層の進展を見た国学を大成したものと言えるが、それは、そのまま、宣長の学問の歩みでもあった。即ち、難解な語句の解明にしても、中世的な、師から弟子への伝授・継承によるものを否定し、多くの文献から用例を集めて、その意味を帰納して求めた契沖の態度に、本当の学問の方法の目を開かれ、古代精神の追求と人間性・芸術性の尊重を真淵から教えられたのであった。「古事記」の研究を終生の大業と定めた宣長は、古代語及び古代思想を明らかにするために、「新古今」・「古今」の和歌や「源氏物語」等の古典研究を行ない、さらに「万葉集」の研究を経、時代を遡りつつ古代への接近をはかった。そして、古代精神を知るためには、儒仏等の外来思想を排除し、研究者の主観・先入観を排除して、実証的な研究方法に拠るべきことを主張し、また、真の学問発展のためには、伝統的な教えにとらわれず、自由な精神のもとに、独創的な思考態度・研究方法が必要であることも説いた。そして、文学の本質は、政治・道徳・宗教などの立場から見て価値づけられるものではなく、作品自体の中に美的価値があると主張した。西洋の学問の影響を受けていない当時において、このように科学的な学問研究の態度や、自由の精神を身につけ、近代文学論に見られるような文学観を持っていたことは驚くべきことである。

宣長の学問と学風は、養子の本居大平、長子の本居春庭に受け継がれ、さらには死後の門人、平田篤胤によって国粹主義の復古思想へと展開されていた。

「玉勝間」について

一、成立と構成

成立と刊行の年代

寛政五年（一七九三）より稿を起こし、享和元年（一八〇一）没するまでの間に書いたもので十四卷（他に目録一卷）の随筆集。此の間、終生の事業であった「古事記伝」をはじめ、「源氏物語玉の小櫛」・「うひ山ぶみ」なども著作、刊行されている。「玉勝間」は、三卷ずつまとめて一編とし、五回に分けて出版されたが、そのうち第四編・第五編は宣長の没後に刊行された。各巻ごとに、巻頭の歌に詠み込まれた花の名にちなんで、優雅な名がつけられている。次にその巻名と発行年月を示す。

第一編	初若菜・桜の落葉・たちばな	寛政七年（一七九五）刊
第二編	わすれ草・枯野のすゝき・からあゐ	寛政九年（一七九七）十二月刊
第三編	ふちなみ・萩の下葉・花の雪	寛政十一年（一七九九）九月刊
第四編	山菅・さねかづら・山ぶき	享和二年（一八〇二）頃刊
第五編	おもひ草・つらく椿・目録一卷	文化九年（一八二二）一月刊

二、書名

書名

また、卷々の巻頭に書かれた「タマカツマ」の文字には、次の四種が用いられている。

玉勝間	書名のほか、第四・九・十一・十三巻
玉賀都萬	第一巻
玉かつま	第二・三・六・八・十二・十四巻 および目録
たまかつま	第五・七・十巻

書名の由来

ただし、この書き方の違いには、とりたてての意味はなさそうである。「タマカツマ」という書名は、第一巻の冒頭に詠まれている、全編の「序」ともいべき歌。

内
容文
体成
立

三、内 容

言草ことくさのすゝろにたまる玉かつま

つみてこゝろを野べのすさびに

(歌意概略Ⅱさまざまな言い草(Ⅱことば)が知らず知らずにあたまる籠、そこに言い草を摘とんでは(摘み)草の野遊びに心を晴らすように)心を晴らす慰みにしようよ。

に拠よっている。「玉」は美称の接頭語、「かつま」は目の細かい竹籠の意である。

内容は多種多様、文章も長短さまざまで、配列にも一定した秩序はない。この雑多な文章の交錯が、かえって随筆集らしい変化のおもしろさを感じさせる。その内容を大別すると、ほぼ次のようになる。

- 1 古語・古事について説明を試みたり、地理・歴史等について考証したりしたもの
- 2 学術上の資料となりそうなものを抜き書きしたり、聞き書きしたりしたもの
- 3 儒・仏の思想を批判したり、学問の方法・態度を論じたり、学問上の体験を述べたりしたもの
- 4 自分自身のさまざまな感懷を自由に述べたもの

学問上の問題から趣味に関する事まで、一〇〇〇項目以上にわたるこの随筆集は、宣長の学問の深さというものが、どんなにその研究範囲や知識の広さによって作り上げられてきたかを示すとともに、情味豊かな人間宣長の姿を余す所なく読者に伝えている。

文章は、擬古文(江戸時代の学者などが、古代、特に平安時代の文学的文章をまねて書いた文体)で書かれ、飾りがなく温雅平明でわかりやすい。江戸時代を代表する随筆集と言ってよからう。

「うひ山ぶみ」について

一、成 立

一 寛政十年(一七九八)六十九歳の時、三十五年を費した畢生の研究著作「古事記伝」四十四巻を書き終えることのでき

執筆事情

書名

内容

二、内容

た宣長は、「国学への道しるべ」を求める弟子たちの切なる願いを聞いて、その年の十月、初学者のための道しるべ、つまり国学への入門書として本書を書き始め、約二週間で書き終えたのであるが、この執筆事情については巻末に次のように記されている。

こたみ（此の度）此書かき出づることは、はやくより（前々から）、をしへ子どもの、ねんころに（熱心に）こひもとめけるを（願ひ求めていたが）、年ごろ（長年の間）いとまなくなとして、聞過しきぬるを、今は古事記伝もかきをへつれば（書き終わったから）とて、又せちにせむるに（切に求めるので）、さのみもすぐしがたくて、物しつる也（書いたのである）。にはかに思ひおこしたるしわざなれば、なはいふべき事どもの（言っておかなければならない事で）、もれたる（書き落としたこと）なども多かりなんを（多いだろうが）、うひまなび（初心者）のためには、いささかたすくるやうもありなんや（助けになることもあろうかなあ）。

いかならむうひ山ぶみのあさころも

浅きすそ野のしるべばかりも

本居宣長

（歌意概略Ⅱこうして此の書物を書いたけれども、はたして初学者のための道しるべとなるであらうか）
なあ、少しでも役に立ってくればうれしいことだが。「ころも」と「すそ」は縁語。
寛政十年十月の廿一日のゆふべに書をへぬ

「うひ山ぶみ」とは、学問の道に初めてはいることを言うのである。

内容は、記紀に記された神代上代の事跡にこそ学問の主目的である「道」があり、この「道」を学びとるための学問として、古代語・故実・歴史・古典・和歌などをどのように学んだらよいのか、その方法と態度を述べたものである。

しかし、この学問の方法論と、学問に対する心構えは、国学・古典に志す者への基本的な指針であるばかりでなく、いずれの方面に進むにせよ、学問の道を志す者にとって教えられるところはすこぶる大きい。本書を読んだだけでも、宣長の、学問に対する厳しさを知ることができる。

「源氏物語玉の小櫛」について

一、書名と構成

成立
書名の由来

石見の国浜田（今の島根県浜田市）の城主松平康定に請われて執筆したもので全九巻。寛政五年（一七九三）に稿を起し、寛政八年に脱稿、寛政十一年に刊行された。初め、松平侯の学問啓蒙を目的としていたが、後、「源氏物語」の注釈・評論書として多くの人々に迎えられた。書名は巻頭の次の歌に由来している。

そのかみのこゝろたづねてみだれたる

すぢときわくる玉のをぐしぞ

構成

一巻・二巻は総論、三巻は年立と考証、四巻は「湖月抄」（北村季吟（一六四一—一七二五）著、源氏物語の注釈書）をもとにした異本との対校による本文考証、五巻以下は全体にわたっての難解語句の注釈である。なかでも、もっとも注目すべきものは、一巻・二巻の総論で述べられている「もののあはれ論」である。

二、内容

内容

「源氏物語」
について

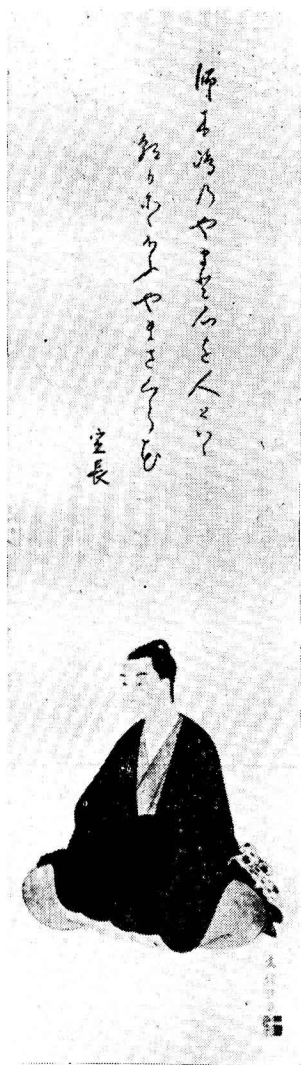
「もののあはれ」

「源氏物語」については、古来、毀誉褒貶、さまざまに言われてきたが、宣長は、儒教的倫理観や仏教的思想、その他政治・道德等のいろいろな功利的立場からの見解を排除し、作品の価値をその文学性の中に見出だし、「もののあはれ」こそ、この作品の生命であるとして、「源氏物語」を、真に文学として価値づけたのである。

「物語とは何か」から始まる本書は、「あはれ」の語源を尋ねつつ、物語、つまりは文学の本質を追求している。勧善懲悪や仏道賛美や知識の啓蒙というような立場でしか書物が読まれず、また書かれなかった当時において、「源氏物語」は「もののあはれ」——美的感動——を書き表わした作品であると説いたのは、いわば、文芸の目的を、

文芸それ自体の中に見出したもので、従来にはなかった、というよりも、むしろ、近代的文芸論と言わなければならぬ。このことは、宣長が単なる考証学的、解釈学的古典主義者、国粹主義者ではなく、文学を文学として読み、味わうことのできる文学者であり、卓抜した識見を持った大学者であることを示す。

玉勝間



宣長肖像

学問的、研究的な考証、解釈、見聞の抜き書きと
 いったようなものから、思想、趣味、生活などに
 関する意見、感想にいたるまで、多種多様な内容を
 もっているだけに、筆者宣長の全人格がうかがわれ
 る。特に学問に対する真摯な、厳しい態度、広く深
 い知識と情趣を愛する心など、平易な文章の中に、
 学者として、人間としての宣長がにじみ出ている。